



1957-1963

## 六甲蹴球部に、熱血教師来る



### 佃先生との出会い

昭和34年度夏合宿は、旧グラウンドに於て行われた。

初日、山の土手の中間の道の上に、仁王立ちした色の黒い、髪の短い、目のつり上がった、一人の人がいた。

「あれ誰や」「先輩みたいやなー」「恐そうな人やなー」「名前何ちゅうんや」「佃さん言うて日体大のサッカー部の現役バリバリらしいで」。これが我々20期の大多数と佃先生との本格的な立合いであった。

いざ練習を始めて見ると、大声で怒鳴り、小股でチョコチョコ走り、結構

足も早いし技術も仲々のものであった。

その秋も深まった頃「佃さん、六甲に教師として来るらしいで」「ほんまかいや」という会話がしきりと交わされ、同期の間では不安が走りました。

翌、昭和35年4月より体育の教師として六甲学院に来られ、すぐサッカー部（当時、蹴球部）の部長になられました。

当時、練習日は中学生が火・木・土、高校生が月・水・金・土となっており、先生は毎日グラウンドに出て大声で練習を指導されていました。その練習は、とても厳しいものが有りました。

「ポリポリするな」「何のこっちゃ」

「チンタラするな」「何やあれ」、怒られている意味がわからない。ミスをするに即「グラウンド5周か10周」と声が掛かったり、背中の方で足音がすると思つて「あれっ」と振り向くと「バシッ」とお尻にキック一発。先生がしゃがんで「何か掴んだな」と思うと小石がピューッと飛んで来る。我々はミスをするに、よく手を後頭部に当てて逃げたものでした。又、冬の寒い日に、ボールを正確に足の甲で蹴る為、裸足でシュート練習を何度もやらされました。甲に正確に当らず足の指を突き指して、中には半泣きになりながらシュートする者も出て来たりしました。当時のサッカーボールは今の様なエナメ



### 六甲初優勝飾る

神戸市内高校新人サッカー

第十三回神戸市内高校新人サッカー選手権最終日は四日午後一時三十分から神戸高校グラウンドで六甲高一御影高の決勝を行ない、六甲が快勝して初優勝した。

▽決勝

六甲 3 (210) 0、御影

ルボールではなく、ただ革を縫い合わせただけの茶色のボールで、変形したり、修理して縫い目が二重になったりして、水を含むとヘディングの時にめまいがし、星が飛んだものでした。又、夕方になると、ボールが良く見えなかったので、表面に石灰を塗って白くして、試合前の練習を行ったりしました。そのため練習が終われば顔はバリバリでした。一方スタミナ作りという事で、六甲ケーブル駅、五毛天神往復の超距離走も何回となく、練習メニューに入りました。又気力面での強化という事で、当たりが弱かったら、先生が飛んで来て、ショルダーアタックの繰り返しである。半分喧嘩で双方ぶつかり合いました。この様な練習を繰り返しながら、実力も徐々に向上して行き、神戸大、甲南大、その他社会人チームと45分ハーフの試合をしても勝てるようになり、当時としては、高校生に対しては、余り負けるという気はしなかった様に思います。試合前日の練習の最後の言葉は決まって「帰って早よ寝、

カゼひくな」という言葉でした。

試合では、先生はいつも、サイドライン際に陣取って大声で指示と指導をされ、ミスをするとコートの中に入って来て「ポカリ」と迫力満点。ある時は持っておられた弁当箱で「ガツン」。弁当箱があたりに散乱という事も有りました。こういった、状況の中で我々20期は、先生が部長に就任当時10名以上いたのが1人去り2人去りと残ったのは、4名になってしまいました。宇川君（在ヒューストン）細見君（在静岡）大頭君（在神戸）と私という事になりました。周りからは、「何でやめへんねん」と再三言われましたが、「やっぱりサッカーが好きやねん」と卒業迄続けました。又、続けられた理由として、昭和36年の神戸市高校新人戦に初優勝した事があります。1年先輩の19期の方々中心のチームに参加させて頂き貴重な体験をさせて頂きました。決勝戦（対御影高）の当日、佃先生は「今日は、俺は試合に行かんから頑張ってきて来い」と言われました。何時も厳

しい指導をされるのに「ほんまかいな」と思い乍ら、試合に臨みました。試合中ふと見ると試合場（神戸高校）の東側の木の陰にかくれる様にして観戦されていました。何となく「やっぱりなー」と思いつつ試合を続け結果「3-0」で勝ちました。先生を胴上げしたのは言う迄もありません。この様に着任されてからの何年間は、佃先生は、我々六甲サッカー部の基礎を作るべく、時には厳しく、時には無茶苦茶に生徒を指導され、他のクラブの連中から「鬼の佃」と恐れられていました。しかし我々同期にとっては、共に先生と青春をした様な、素晴らしい思い出を作った「佃」でありました。現在も同期（20期生）と話をするとき必ず「佃先生元気にはるかな」「最近では、鬼の佃から、ホトケの佃になったらして」と話題になっております。この様に、熱血佃先生を中心にサッカーに明け暮れた20期生でありました。

〔石坪 一之〕